



## 漢点字の散歩（五十六）

岡田 健嗣

カナ文字は仮名文字（7）



拙稿に筆を染めてから久しい年月を過ぎました。何度が記したことではありませんが、この間の事情を、もう一度申し上げることをお許しいただきたいと存じます。

欧米の視覚障害者と異なつて我が国の視覚障害者は、その母国語を表す文字から阻害されているという現状に対して、故・川上泰一先生は、触読文字であるレイ・ブライユが創案された点字に従った構成の点字符号で、〈漢字〉を表現できる点字の体系を開発されました。一九六九年に〈漢点字〉として発表されました。

私がこの〈漢点字〉の存在を知ったのは、一九七七年のことでした。ある点字の雑誌、残念ながら今では、名称も覚えていないほど以前のことでした。

当時の私は、モラトリウム（大学生活）を終えて、再度社会生活に挑戦しなければならぬ状況にありました。そのモラトリウムというのも砕いて言えば、盲学校を出たばかりの私が、その社会生活の厳しさに耐えられないという気持ちになつて、一休みしてやり直そうと考えたところから、それなら学校だと、誠に簡単に考えてのことだったと記憶しています。当時の盲学校を卒業した直後の私にとつての生き辛さという状態を当時の私は、視覚障害という障害が社会に理解されていないという理由だと思つてもいたのです。勿論そういう側面は大きなウェイトを占めているということはあるでしょうし、そういう側面から社会に働きかけるということも大変大事なことだと思つてはおりますが、しかしどうもそればかりではない、別の要件が、それも一つではなく、複数ありそうだと、ということに気づいたのは、そのモラトリウムの間だったに違いないと思います。

社会というのがそんなに優しい訳はない、盲学校を出た直後に比べると、考えたり感じたりという、色々

な意味での余裕が生まれて来たためか、そんな風に捉えられるようになってきて、何をどうすれば、社会の一員としての手応えのある生活を営めるようになるかと、周囲を見回せる余裕が生じつつあったとも言えるのかも知れません。

苦勞しているのは私だけではないなあ、苦勞の内容も人それぞれだなあ、苦勞しているように見えない人も結構いるなあ、などと余裕のある観察をしたりもしてましたのですが、然う斯うしているうちにモラトリアムも期限付きだということを感じ出させられる時期が、とうとうやって来たのでした。

生きている以上、社会生活をしなければいけないのですが、その社会から受け入れられないという気持ちには消失しません。ただ一つの変化があったとすれば、私が社会から受け入れられないというばかりでなく、ひよつとしたら、私が社会を受け入れていないのかもしれないということを考え始めたことかもしれません。社会で行われていることを、私自身も行う必要があるのではないか、そうしなければ社会との交通は図

れない、そんな風に考え始めたように覚えております。そんなころに出会ったのがこの〈漢点字〉でした。

〈漢点字〉は、ルイ・ブライユが創案し構成した六つの点を組み合わせて、触読に適合した触読文字である〈点字〉の構成に従って組み立てられた、〈漢字〉を表す触読文字です。つまり指で触れて読むことができる〈漢字〉です。その〈漢点字〉の存在を知って、私が社会を受け入れるということは、なるほどここから始めなければいけないのだ、直感的にそのように思ったのでした。文字を読むことを通して社会を受け入れることができるかもしれない、文字を読むことができなかつたことがそもそもその初めであり、現在直面している障壁だ、何とも勇ましい覚悟をした上で、〈漢点字〉の習得に臨んだのでした。

当時よく言われていたこと、あるいは現在もなお残照に似た言われ方で言われていることかもしれません。が、〈漢字〉を表す〈点字〉には、二通りある、一つがこの川上泰一先生の創案された〈漢点字〉、もう一

つは筑波大付属盲学校で教鞭を執っていた長谷川貞夫氏の考案された「6点漢字」と呼ばれる体系だと言うのです。私はまず〈漢点字〉を習得して、その後「6点漢字」にも挑戦してみました。そこで分かったことは、「6点漢字」という体系は、点字の符号を利用して〈漢字〉を表していると言いつてはいますが、触読はできないものだということでした。こう書きますと、触読ができないのはおまえさんだけで、他の人は皆さん指で触れて読んでいますよ、という声が聞こえて来そうですが、そうではありません。最初から触読を想定して考案されたものではなく、パソコンに点字キー入力することだけを目的に考えられた符号で、現在も触読している人はおりません。触読ができないというのも、最初からその必要を入れずに考えられたものだったのですから、当然と言えば当然なのでしょう。断言できることは、触読文字で〈漢字〉を表す文字は、川上先生ご創案の〈漢点字〉しかないということですし、文字は書物として読むためのものですので、この〈漢点字〉を触読して書物を読むことこそが、わ

が国の視覚障害者が読書することと言つてよいと考えられるようになりました。このようにして私は、「6点漢字」の学習を途中で放棄して、〈漢点字〉の触読の熟達に力を注ぐことにしたのでした。「6点漢字」のテキストは、虚しく本棚の隅に忘れられることになってしまいました。〈漢点字〉も、学習しただけでは何の役にも立ちません。習得した後には、何をどのように読むか、読んでもどうするかという、言わば読書一般に言われることが問われます。現状として考えますに、現在の〈漢点字〉の使用者に突きつけられている課題は正にこの点にあるので、残念ながらその課題に充分に答えられていないとは、到底言えません。〈漢点字〉の普及が遅々として進まないのも、この点に因していると言わざるを得ません。誠に残念なことです。

その後私は本会を立ち上げて、必要と思われる資料の漢点字訳を進めて参りましたが、活動を進めるうちに、その必要と思われるという点において、目標が絞られて来たように思われます。

私が社会に出たころ初めて耳にしたこと、しかも現

在も視覚障害者のいわゆる有識者の声として、時折耳に入って来ることがあります。「われわれのご先祖様は、なぜカナ文字で日本語を表すようにしてくれなかつたのだろう。誠に恨めしいことだ。」というのです。つまりわが国の文字には「カナ文字」という立派な文字があるのだから、昔の人が漢字を廃して、この「カナ文字」だけで表すようにしてくれていれば、われわれ現在の視覚障害者がこれほどまでに苦勞しなくともよいのだ、ということですよ。無い物ねだりと言えば誠にその通りですし、道理が弁えられていないと言つても誠にその通りなのですが、こういうことは、視覚障害者だけが顔を合わせるような場所でのみ言われることで、一般には漏れることはありません。発言者も充分そのことを弁えて言っているのです。

これに関連して、一つのエピソードが思い起こされます。私が〈漢点字〉の普及を図る積もりで、ある盲学校をお訪ねした折りに、全盲の理療科（マッサージ・鍼・灸を習得する科目）の先生と校長先生がおられました。私は本題に入る前の雑談の中で、〈漢点字〉

のお話に入る前の導入の積もりで、「漢字の知識がないと本が読めないでしょう」と申し上げましたところ、その全盲の先生が、「本が読めない?!」と、訝しんだ、あるいは咎めるような声で反論しようとなさいました。透かさず校長先生が「それはまあよいでしょう」とお言葉を挟まれて、その先には進みませんでした。盲学校の全盲の先生方には、どうやら漢字の知識はなくてもよろしいとお考えである方が多数おられるご様子を、垣間見た思いをしたのでした。

#### 閑話休題！

本会の活動の目標が自ずと絞られて来たところで私は、その前に〈漢点字〉の力を確認する必要があると考えました。「力」と書きましたが、勿論私は、〈漢点字〉を学習した当初からその力を疑ったことはありません。疑いはしませんでした、それならばなぜに〈漢点字〉の普及が見られないのか、このことが大きな疑問となつて来たのでした。そのためには、その「力」を、言わば目に見える形にしておく必要がある、そう考えるようになったのでした。

そこで考えたのが、最終の目標の設定と、そこへ至るプロセスです。

最終目標の設定は、それほど困難なものではありません。幸いにして本会の活動は、当時横浜国立大学の教授であられた村田忠禧先生のご尽力で、学習研究社様からデータをご提供いただいたいて、『漢字源』（藤堂明保編）の漢点字版を製作するところから始まりましたので、この『漢字源』漢点字版の製作という活動の延長線に置くことができそうだということは、その当初から見当が付いておりました。『漢字源』の完成は、それまでには存在しなかった（漢点字）を使用して、漢字の意味や由来を調べる方法を確立したことを意味します。本会の活動の当初にこのようなエポックがあつたことは、本会にとって、また私にとつても、誠に幸運なことだったと申してよいと考えます。このようにして『漢字源』を手にした私どもにとつて次に考えるべきことは、まずは文字を読むのに必要な資料の製作から、その後は古典というところを念頭に置きました。

『漢字源』の後は文学作品を手がけつつ活動のリズムを整えて参りましたが、九〇年代の終わりに白川静先生の三部作『字統』、『字訓』、『字通』が上梓され、その後に文字を常用漢字に限り、さらにその内容を平易にした『常用字解』（平凡社）が発行されました。誠にタイミングのよい時期でした。

この『常用字解』の漢点字版は約八年という年月をかけて完成に至りました。これによって、（漢点字）を学ばない視覚障害者やその周辺の晴眼者の皆さんから無言の内に向けられていた、（漢字）を点字の符号で表すには限界があるだろうという疑義あるいは期待に、見事に否を示し得たと考えられるようになりまして、（漢点字）の力に自信を得たのでした。

本会の活動が『常用字解』に着手するのと平行して私は、放送大学の古典文学や日本語の歴史に関する講座を受講しました。正に（漢点字）がどこまで有効か、大学の講座の受講に不十分さを感じるようでしたら、それが限界ということになる訳ですから、それを試して見る必要も価値もあるはずだと考えてのことで

した。放送大学の受講に当たっては、視覚障害者の受講という点で起き得る困難はありましたが、〈漢点字〉の使用による困難は、一切ありませんでした。〈漢点字〉は、見事にその力を發揮して、単位の取得を支えてくれたのでした。

このようにして取り敢えずの基本的な資料の、極一部ではありますが、完成させることができて、次の目標として、古典を取り上げることになりました。

私個人としては、これが最も大きな目標であったのではあります。満を持して『萬葉集』がどうしても欲しいという希望を提出して、会員の皆様のご協力をいただいで、いよいよ『萬葉集』に取りかかっていたことになりました。『萬葉集』の解説書も数多くありますが、その中の一冊、『萬葉集釋注』（伊藤博著、集英社文庫、全一〇巻）の漢点字訳に取り組んでいたことになりました。

私が『萬葉集』を読みたいと申しますのは、勿論その中に収録されている歌を鑑賞したいという気持ちで言っているわけではありませんが、私にそのような鑑賞力があるとは思われませんので、鑑賞に関しては何も申

すことはできません。

それならばなぜに『萬葉集』か、それは、先に述べました視覚障害者の識者と呼ばれる方々が口になさる、日本語を「カナ文字だけで表記する」ことが可能か、あるいはそのようなことがあり得たか、ということに関心を寄せているからです。現在の日本語の標準的な表記法である「漢字仮名交じり法」ではなく、カナ文字だけで表す表記法があり得るか、あるいは歴史のどこかで、誰かが別の方向に舵を切っていたらどうだったか、ということに関心をそそられるからです。

実際現在も、カナ文字だけで文章を書いている方もおられるようですし、詩や和歌に、カナ文字だけで書かれている作品もあります。その意味では充分にその可能性はあったはずだと、まずは考えてもよいかと思われま。しかし実際はそうはならなかった。カナ文字だけで表された詩や和歌も、実はそのように表されることが求められて表されたものであって、そのような作品があるからと言って、カナ文字だけで表すことが一般となったということはないことは、反論の余地

のないところです。日本語の標準的な表記法が、「漢字仮名交じり」であることは、どうしても揺るぎません。これはどうしたことか……！

『萬葉集』を通して、幾つか興味深いことを知ることでできました。

『萬葉集』は、いわゆる「万葉仮名」で表されていると言われます。しかしこれは、全てが「万葉仮名」で表されている訳ではないということが隠されて言われることで、「万葉仮名」とは一体何なのかというところから説明する必要があることでもあります。現代のカナ文字とは、どのように一致し、どのように相違しているかが判然とすれば、言い換えれば「万葉仮名」とはどんな文字かということが判然とすれば、カナ文字だけで表す表記法が一般となればということ、如何に幻に過ぎないかということも判然とすることになるのではないのでしょうか。勿論結論ありきというわけではありません。「カナ文字だけの表記法があってもよかった」のではないかという、多数の視覚障害者が現実を直視できる環境は、今もまだ整ってはい

ないようです。そこで以下に、これまで『萬葉集』に当たりながら日本語の表記の当初の姿を想定して来たところをまとめてみたいと思います。

『萬葉集』の原文はいわゆる「万葉仮名」で表されていると言われて、私もそのように想像して参りましたが、実はそこに使用されている文字は、「カナ」と呼ぶにはそれほど単純なものではないということを知ることになりました。『萬葉集』は、雄略御製歌と舒明御製歌の二つの御製歌から始まります。ところがこの二つの御製歌は、その後にくく歌とは、かなり趣を異にしています。どのように異なっているかと申しますと、それはその後の歌群に見られるような、書記された定型詩（長歌・短歌・旋頭歌、あるいは漢詩）ではなく、書記以前の、舞踊を伴うような、集団で唱された伝承歌と思われる歌（雄略歌）や、儀礼の場で称される「国見歌」（舒明歌）であって、書記されることを想定した表記法とは異なる、多数の声を合わせて唱えるための歌が冒頭に置かれていることです。逆に見れば、その後にくく歌群は、声に出して唱えること

は勿論、さらに書記を前提として作られた歌であった、極めて高度な形式によって、またその示すところも極めて多岐に渡った歌だということが言えます。冒頭の雄略御製歌と舒明御製歌の二首に続く歌群が、極めて音数律の定まった定型に従った歌であると言うことは、恐らく現代の詩にも散文にも、根の深いところでは何かを指示しているように思われます。

もう一つ言えることは、この定型の歌群が、ほとんどいきなり出現していること、『萬葉集』と並んで最古の書と言われる「記・紀」に、記紀歌謡としてこの定型の歌群よりも以前に唱えられていた歌が収められているに留まっています。それらの歌と『萬葉集』の定型の歌群との間が、言わばミッシングリンクとなっていると言えるようなのです。



## 点字から識字までの距離(一一二)

### 通所支援事業所へのサービス(二)

山内 薫

#### キッズサポートリマへの訪問

「キッズサポートリマ」は未就学から高校三年生までの重い心身障害のある児童とその家族のための通所支援事業所で、次の二つの事業を展開している。

一、墨東養護学校（墨東特別支援学校）の在校生を対象にした放課後等デイサービス

月曜日～金曜日は一四時から一七時半まで、子どもを学校まで迎えに行き帰りも車で送る。

日曜・祝日を除く学校休業日は九時半から一七時まで 各家庭とりまの間を車で送迎する

二、未就学の重症心身障害児とその保護者を対象にした児童発達支援

月曜日～金曜日の九時から一三時半まで

案内には「ご家庭や学校の間の三つめの居場所とし

て、児童とそのご家族が、心豊かで健やかな生活を送れるように、サポートしていきます。」とあり、特色として次の四点が記されている。

「○キッズサポートリマは、「学校以外にも地域で過ごせる場所が欲しい」という、児童・ご家族の希望が実現した場所です。

○在宅生活を送る児童の体力・知力や生活能力・社会的応力の向上を図ります。

○看護師を配置し、児童の健康管理や医療連携を行います。医療ケアが必要な児童でも安心して利用できます。

○保護者同士が集まったり、レスパイト（介護者の休養）として利用できます。」

区内には二〇以上の通所支援事業所があるが、重度の障害児を対象としているのは唯一このりまのみだった（二〇一六年当時）。

所長のSさんからの要請があり、施設側と図書館側の日程調整の結果、二〇一六年三月三〇日（水曜日）の午後に訪問することになった。すでに春休みに入っ

ていて午前中から来所している子どもたちもおり、多くの子どもが参加してくれるということでこの日が選ばれた。

なお前回も同行して下さった筑波大学大学院のKさんが今回も参加して下さることになった。

一三時 Kさんがひきふね図書館に来館。今日行う行事用大型絵本『ぐりとぐら』（なかがりえこ文 おおむらゆりこ絵 福音館書店）の中に三回出てくる歌の練習と文章も読む通し練習を二回行った。

一三時三〇分 私とKさんひきふね図書館職員のおさんとHさんの四人で自転車を使って、りままで向かう。ひきふね図書館から両国駅に近いキッズサポートりままでは自転車で三〇分余りかかる。

一四時過ぎにりまに到着すると二階の小さな部屋（相談室）に案内されて所長のSさんの話を聞いた。

「今日は春休みで小学二年生から高校生までの七人の子どもが来ている。四月から高校生は障害者施設へ、一人は八広のすみだこどもの家に行くことになっている。マルチメディア・デイジー図書に興味を持ち

そうな子どもが二人いる。この二人は会話によるコミュニケーションが可能。そのうち一人は二桁の足し算の時に上の1の位と下の10の位を足したりしてしまふ。本を読んでも行末から次行の行頭にうまく移るこゝとが難しいので、マルチメディア・デイジーは有効なのではないかと思っている。」

その後、一階に移って入り口近くに机を出してもらい大型絵本『ぐりとぐら』とキーボードをのせて上演した。キーボードによる歌の伴奏と文章の読みは山内、大型絵本の持ち役はKさん、そして歌はKさんとHさんが担当した。歌入りのぐりとぐらはみんなとても良く聞いてくれ、歌のあとに拍手してくれる子どももいた。

次にHさんが行事



「ぐりとぐら」を寝ながら見る子どもたち

用大型絵本『だるまさんと』（かがくいひろし作 ブロンズ新社）を読み、続いて山内が行事用大型絵本『おめんです』（いしかわこうじ作 ・絵 偕成社）を読んだ。

行事用大型絵本は横になったり、臥せ

っている子どもからも大きくて見やすいので、皆さんよく聞いてくれた。「おめんです」では、途中から前にいた女の子（小学校四年生）にお面の下の動物を質問すると答えてくれた。

次にOさんがiPadに収納されている伊藤忠財団作成マルチメディア・デイジー図書の『コッケモーター！』（ジュリエット・ダラスIIコンテ作 アリソン・パートレット絵 たなかあきこ訳 徳間書店）を見



大型絵本「おめんです」

せた。寝転んでみる子どもが多く、広い場所を必要とするためiPadの小さい画面では遠くて画面が見にくくなること、音が小さいことなど複数の子どもたちに見てもらうには無理があったようだ。出来ればパソコンとプロジェクトorスピーカーを用意して壁に映して見てもらう工夫が必要だろう。やはりiPadはあくまでもプライベートユースだと感じた。

全員への読み聞かせの後には、iPadに収納されているマルチメディア・デジタル図書の表紙を並べたポスターを見てもらい、個々に読みたい本を選んでもらった。高学年（四年生）の女の子は電車が好きだそうで『新・東京のどんしゃずかん』（松本典久作 井上広和絵 小峰書店）を自分で画面に触れてページをめくりな



iPadで「ラプンツェル」を読む中学生

がら読んだ。その後

『はらぺこあおむし』

（エリック・カール作

もりひさし訳 偕成

社）が好きな子どもが

三人いるというので集

まってもらい、iPad

に収納されている

『はらぺこあおむし』

を見てもらったが、や

はり画面が小さく遠い

場所にいた子どもは見にくいようだった。遠くで見て

いた子にもう一度画面に触れながら見てもらったが、

途中で疲れてしまったようだった。

次に墨東特別支援学校の中学に通っているという男子がグリム童話の「ラプンツェル」（『愛蔵版おはなしのろうそく 三』 東京子ども図書館）をiPadで読み始めた。この作品は伊藤忠財団が作成しているマルチメディア・デジタル図書の中でも、数少ない縦



表紙の絵を見ながら本を選ぶ

書きの作品となっている。この中学生がSさんの話していた子どもで、普通の本だと次行に視点を移すのが難しいために読むことが困難な生徒だった。しかし、マルチメディア・デイジー図書だと音声を読んでくれる上に、読んでいる部分にハイライトが当たって、今読まれている部分はどこか分かるので、文字を追うことも文章を理解することも出来、とても集中してラプソデルを読んでいた。実は墨東特別支援学校では熱心な教師によって学校内でマルチメディア・デイジー図書が積極的に取り入れられており、彼も学校でマルチメディア・デイジー図書を利用しているということだった。途中で帰る時間が来たために最後まで読むことができなかった。

次に高校生の女性にマルチメディア・デイジー図書の『おこだでませんように』（くすのきしげのり作 石井聖岳絵 小学館）を見てもらった。彼女は進行性の難病で、だんだん言葉が話せなくなっていて、現在は言葉を発することができない。小さい頃からお母さんに本を読んでもらっていて、本は好きだという。しか

し、目の前にiPadを持って見てもらったところでも集中して見てくれた。Sさんによれば、興味があれば目をつむってしまふとのことだった。iPadの画面にタッチすることは自力ではできないので、マルチメディア・デイジー図書であっても自力で読むことは困難である。最後まで見てくれたが、面白かったかどうかの意思表示を確認することができなかった。どこか反応する体の部位があれば○と×のパネルなどを用意してどちらかを選んでもらって意思の確認ができないか、また、読む本の選択もそうした方法でもらえたらと思った。

Sさんも予想以上に子どもたちが喜んでみてくれたと話された。今後定期的に訪問してお話し会などができれば良いだろう。高齢者サービス協力者や子どものお話会に協力して下さっているお話しグループの方に是非協力してもらったり、そうした施設でキーボードを弾いてくださる方の協力も得られれば良いだろう。今回の訪問から感じたのは、①iPadはあくまでもプライベートユースであること。②大勢の子どもが

一緒にマルチメディア・デジタイズ図書を見るにはパソコンとプロジェクトとスピーカーを使うこと。③次回行くとしたら、今回の反省から大型行事用絵本『はらぺこあおむし』を持って行つて読むこと。また他の施設でもやった大型行事用絵本の『おおきなかぶ』（A・トルストイ作… 内田莉沙子訳 佐藤忠良絵 福音館書店）を歌付きで読むこと。巻紙芝居『おおきなおおきなおいも』（市村久子原案 赤羽末吉作・絵 福音館書店）を上演すること。（実はこの「おおきなおおきなおいも」に関しては、私が作成した巻紙芝居を昔図書館で見た所長のSさんが原本を買ってきて同じものを作るようにりまの職員に指示していたが、未だにできていないという裏話を聞いた）

筑波大学大学院のKさんの感想

マルチメディアデジタイズ図書の有用性を改めて認識できた。手を動かすことに不自由がありページをめくりにくい人でも、タッチをするだけで次のページに、自分のペースですすむことができる。「自分で本が読める」というのは大きな意味があることだと感じた。

## 「東京漢点字羽化の会」第166～167回

### 例会報告とわたくしごと

木村多恵子



2019年10月の例会（第166回）10月9（水）

13…30～15…30 ヒューマンプラザ7階第1会議室

朝日〃be on Saturday〃は「歴史探

偵」の入力グループを決めた。

m1・メール、のアドレスを変更するので、Mさんを選んでいただいた。

横浜へ2、3人でプリンタを見に行っていた。

いつも皆様ありがとうございます。

『萬葉集釋注』の校正のことで、『横浜漢点字羽化の会』のYさんがお見えになった。

朝日の「〃be on Saturday〃は10

月から放送大学教授・明治学院大学名誉教授・政治学者の原武史「歴史ダイグラム」に替わった。

2019年11月の例会（第167回）11月13日（水）

13:30～15:30 ヒューマンプラザ7階第1会議室  
いつもの朝日「歴史探偵」のグループの組み合わせを決めていただいた。

視覚障害者のための著作権も問題がかなに替わるようになり、岡田さんが説明をしてくださった。

2020年1月、2月、3月の月の例会と学習会の予定を決めた。

1月8日、2月12日、3月11日

学習会は、2020年1月11日、2月22日、3月28日である。

『古語辞典』についての報告を岡田さんから受けた。

『古語辞典』の付録の中の細かい表の書き方を齋藤さんが説明した。

2020年1月8日が羽化の例会なのでこの先の予定はあらためてお知らせ致します。

木村から……、申し訳ありませんが、木村からのご報告を纏めることができなくなりました。今まで本当にふつつかなわたしをお優しく見守って全てをお許し下さいました皆様にかかるの御礼を申し上げます。本当にありがとうございます。

わたくしごと 119号

クウエル ウォー

いつものように考え事をしながら、床ふきをし、なにげなく小さくラジオをかけていた。

男女二人の会話は、多分「ペドロ&カプリシャス」というポップスを歌うグループであろうとわたしにもぼんやりと推察がついた。二人の話を切れ切れに聞いていたら、「最初は大勢のグループだったが、初めにわたし（男性）が辞め、やがて散りぢりになり、改めてこの二人でグループを結成した……。」というような

ことを話していたからである。会話と言っても主に男性が話していた。

二人の活動内容は、わたしには分からなかった。だいたい、今しゃべっている男性がペドロなのか、カプリシヤスなのかも分からないわたしである。そして歌詞はどちらが書き、曲はどちらが担当した：などちんぷんかんぷんであった。一つの曲の話をして、曲そのものを、その場の流れに沿って聞かせてくれないので、ずっと分からずじまいで聞き流してしまった。

：「だんだんカバー曲もやるようになってね。『クウエル ウォー（悲惨な戦争）』とかね。」と男性が言った。

え？それはなあに？クウエル ウォー！という言葉が飛礫のように耳に飛び込んできてわたしをぎよっとさせた。だが無知なわたしにはクウエル ウォーがどんな曲であるか、誰が、どこで歌っていたものか全く見当がつかなかった。しかも番組そのものがこれで終わってしまったのだ。

この「クウエル ウォー」というタイトルだけでわ

たしは、曲を探してもらいに図書館へ走った。図書館の方はさすがである。CDの正式なタイトルは聞きそびれたが、ネットから一枚のCDを探してくださった。歌っているのは、ピーター ポール & マリーだという。即座にそのCDをお借りし、曲のトラックナンバーは16だと教えていただいた、家に帰り、一気にトラック16を聞いた。

え？…？ この曲？メロディーは知ってる！わたしは中学生だった頃だろうか、メロディーだけは何度も聞いていた。けれどもタイトルも曲の背景も内容も、英語を聞き取る力のないわたしは他の流行の歌と共にわたしの心から素通りさせてしまっていた。ただ、このメロディーは甘く優しく切ないまでの悲しみをたたえていて、偶然聞くチャンスがあると静かに聞いていたことを思い出した。

今新たに何度も何度もこの曲を聴き、

「トウマロー イズ サンデー、

マンデー、イズ ザ デイ、」

などほんの少しだけ聞き取れるようになった。

ああ、このひたすら愛し合う一組の（いいえ、多くの恋人たちの）代表の歌だったのだ。

やっぱり原詩を写させていたきたいと、またまた図書館へ…。

「b」「d」「e」「p」「t」

など聞き取りにくくなっていくわたしなのに、根気よく図書館員さんは写させて下さった。

英語の、一つ一つの単語はさほど難しそうではないはずなのに、通して意味を理解することができないわたしのために、彼女はやはりネットから日本語の意訳を探してこれも写させてくださった。

「The cruel war」という言葉は最初の一回だけであった。メロデーは知っているのに、懸命に歌詞を見ながら一緒に歌った。この思いに引きつけられながら…。

この曲が流行った頃はベトナム戦争であっただろう

か。

わたしは同じようなテーマの歌をふと思いついた。フランスがアルジェリアとの戦争（？）を扱った、1957年頃の「シエルブルーの雨傘」という映画のテーマ曲だったと思う。確か同じタイトルのシャンソンで、「シエルブルーの雨傘」と言ったと思う。こちらは「行かないで、行かないで」と訴える歌だったように思う。

わたしにはもっと身近な、わたしの母と兄の現実の話もある。

1942年頃だろうか、兄が赤紙を受け取り、中国へ発つ間際、母と兄は上野の山へ行ったという。あの当時はまだ上野は森だったという。母は兄に取り縋って「帰って来ておくれ、早く帰ってきておくれ」と泣いていたという。もうその当時は「行かないで」という言葉さえ口に出せなかったのだろう。

## Cruel War

The cruel war is raging  
Johnny has to fight  
I want to be with him  
                  from morning to night

I want to be with him  
it grieves my heart so  
Won't you let me go with you?  
No, my love, no

Tomorrow is Sunday  
Monday is the day  
That your captain will call you  
                  and you must obey

Your captain will call you  
it grieves my heart so  
Won't you let me go with you?  
No, my love, no

I'll tie back my hair  
men's clothing I'll put on  
I'll pass as your comrade  
as we march along  
I'll pass as your comrade  
no one will ever know  
Won't you let me go with you?  
Yes, my love, yes  
.....  
Yes, my love, yes

わたしはこの話を高校を卒業した頃だったか、上野の森を切り崩し、土だった全ての道をコンクリート舗装されたところに、母を思つて、兄はわたしに話してくれたのだ。上野の森での、母と兄の切ない思い出の場所、上野の森がなくなる寂しさも含めて、兄はわたしに話してくれたのだと思う。

兄は奇跡的に遭難を避けられた船に乗って帰つて来

られた。けれどもそれまで母は毎夕玄関先に佇み、息子の帰りを待ちわびていたという。これはわたしの従姉妹から聞いた話である。  
この思いは、世界中の幾千万の母の苦しい思いである。戦争をしている当事者に関わりなく全ての母の願いなのだ。

そして、戦争はどこで起きても悲惨なのである。

最後に「Cruel War」の原詩と日本語意識とを付記させていただきたい。スペリングは特にわたしが聞き違えて書き取った可能性があるので、このことの責任は全てわたしである。関わってくださいましたYさん、本当にありがとうございます。

### 悲惨な戦争 (ネットより日本語意識)

1 荒れ狂う戦場にジョニーは行ってしまおう。

わたしは朝から晩まで、彼と一緒に居たいの。

一緒に居たい： その思いはわたしを深く悲しませる。

わたしも一緒に連れて行ってくれない？

いいえ、それは駄目ね。

2 明日は日曜日、月曜日が運命の日。

月曜日になれば、あなたはキャプテンの招集に従わなければならぬ。

あなたはキャプテンに呼ばれて、行ってしまおうことを思うと、わたしはとても悲しい。

わたしも一緒に連れて行ってくれない？  
いいえ、それは駄目ね。

3

髪を後ろに束ね、男の服を着て、あなたの戦友のようにして、一緒に行進するわ。

あなたの戦友のふりをして通りすがれば、誰も気が付かないわ。

だから一緒に連れて行って…。

いいえ、それは駄目ね。

4

ああ、ジョニー。

わたしはあなたに冷たくされるのが怖い。

わたしは全人類のどんな人よりもあなたを愛しています。

言葉では言い表せないほどあなたを愛しているの。

だから、どうか、わたしと一緒に連れて行って。

いいよ、と言って。

いいよと…。

2020年1月5日(日)

孔子の弟子たち

子路（季路）

子曰、道不行、乘桴浮于

海。從我者、其由與。子路

聞之喜。子曰、由也、好勇

過我。無所取材。

（公冶長第五）

閔子侍側、閭閻如也。

子路行行如也。冉有・

子貢、侃侃如也。子樂

若由也、不得其死然。

子曰、片言可以折獄者、

其由也與。子路無宿諾。

（顔淵第十二）

子曰く、道行われず、桴に乗りて海に

浮ばん。我に従わん者は、其れ由かと。

子路之を聞いて喜ぶ。子曰く、由や勇を

好むこと我に過ぎたり。材を取る所無し。

由子路の名。

師から信頼の言葉をかけられて喜ぶ子路に、勇ましいことを好むのは私以上だが、彼の材料がどこにもないのだよと言う。

閔子、側に待す、閭閻如たり。子路

行行如たり。冉有・子貢、侃侃如たり。子

樂しむ。由の若きは、其の死を得ざらんと。

閭閻如（ぎんぎんじよ）おどやかな様子。

行行如（こうこうじよ）ほこらしげな様子。

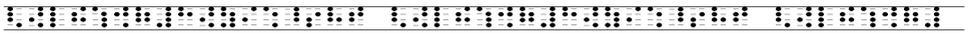
侃侃如（かんかんじよ）なごやかな様子。  
優秀な門弟四人にかこまれて、樂しげな孔子。子路のような男は、安らかな死に方はできないと言った孔子の言葉は後的小中する。

子曰く、片言以て獄を折む可き者は、其れ

由なるかと。子路は諾を宿むること無し。

ただの一言により、公正な裁判の判決ができるのは、子路だけであろうと賞賛する。

一旦承諾したことは、そのままにせず、必ず実行する人でもあった。



子曰ク、道不行ハレ、乘リテ  
 桴ニ浮バン于海ニ。從ハ  
 シン我ニ者ハ、其レ由カト與。  
 子路聞イテ之ヲ喜ブ。子曰ク、  
 由ヤ也好ムコト勇ヲ過ギタリ  
 我ニ。無シ所取ル材ヲ。  
 (公治長第五)

閔子侍ス側ニ、如タ  
 リ也。子路行行如タリ也。冉有・子貢、  
 侃侃如タリ也。子樂シム。若キハ  
 由ノ也、不ラント得其ノ  
 死ヲ然。(先進第十一)  
 ~ 門構え言ぎん穩やかな様

訓点・訓読は、諸橋轍次『論語の講義』（大修館書店）による。  
 他 参照図書：金谷 治『論語』（岩波文庫）  
 吉川幸次郎『論語』（朝日選書）

## 子路



前543～前481年 魯国出身。  
 姓は仲、名は由、字は子路、または季路。

「德行」は顔淵、「言語」(弁舌)は子貢と言われるのに対し、子路は「政事」の才を評価される。率直で、武勇と実行力に優れる。仕えていた衛国の内乱にまきこまれて殺された。

孔子と子路の師弟関係を描いた中島 敦<sup>あつし</sup>の短編小説『弟子』は、インターネットの青空文庫でも読めます。

## 「報告と」案内

明けておめでとうございます。

二〇二〇年となりました。今夏、東京オリンピック・パラリンピックが開催され、海外からのお客様が多数お出でにられます。皆様の内にも、楽しみにしておられる方が多数お出でになるはずです。成功をお祈り申し上げます。

### 一 『萬葉集釋注』第八卷

現在、伊藤博著『萬葉集釋注』（集英社文庫）全一〇巻を、毎年一冊漢点字訳して、横浜市中央図書館に納入しております。今年度はその第八巻、「万葉集」の巻き第十五と巻き第十六が収録されております。

まだ全巻を見渡すことができませんので、詳細をご紹介するまでには至りませんが、巻き第十五の初めは、遣新羅使が残した御歌が収録されております。

伊藤先生の解説によりますと、新羅に派遣された使節の作った歌を、一つのストーリーとして編集された

ものと言われます。百年後の『伊勢物語』や『大和物語』などの歌物語に通じる物語性を示していると言われます。

冒頭の三首をご紹介します。

三五七八

武庫の浦の 入江の洲鳥 羽ぐくもる 君を離れて  
恋に死ぬべし

むこのうらの いらえのすどり はぐくもる きみ  
をはなれて こひにしぬべし

### 【原文】

武庫能浦乃 伊里江能渚鳥 羽具久毛流 伎美乎波  
奈礼豆 古非尔之奴倍之

三五七九

大船に 妹乗るものに あらませば 羽ぐくみ持ち  
て 行かましものを

おほぶねに いものるものに あらませば はぐく  
みもちて ゆかましものを

【原文】

大船尔 伊母能流母能尔 安良麻勢婆 羽具久美母  
知弓 由可麻之母能乎

三五八〇

君が行く 海辺の宿に 霧立たば 我が立ち嘆く  
息と知りませ

きみがゆく うみへのやどに きりたたば あがた  
ちなげく いきとしりませ

【原文】

君之由久 海邊乃夜杼尔 奇里多々婆 安我多知奈  
氣久 伊伎等之理麻勢

「武庫の浦」から船に乗って海を渡ろうとするとこ  
ろから話は始まります。残された妻の心の吐露と、新  
羅へ向かう人々の思いを、歌物語の進行として編まれ  
ていると言われます。編者は大伴家持と推定されてい  
ます。家持はこの後、奥羽地方に左遷されて先の地で  
没します。ある意味で『萬葉集』は、悲しみを蔵した

書と言えるのかもしれない。

二 岡田メモ

『常用字解』の音訳も半ばを過ぎようとしておりま  
すが、その中で、漢字を説明する必要に迫られまし  
た。その説明にも二通りの方式が求められました。一  
つは、「一文字の読みと意味」の説明、もう一つが  
「字形」の説明です。字形で意味を説明することはで  
きませんし、意味で字形を説明することもできません。  
どうしてもこれらは二つに分ける必要のあること  
が分かって来ました。

そこでメモとして、読み・意味からの説明をまとめ  
ようとして作って来た「岡田メモ」が、五千字に達し  
ようとしております。

本会のホームページ(<http://www.ukanokai-web.jp/>)  
にアップロードされておりますので、ご遠慮なくご参  
考に供していただければ幸いに存じます。月に一度更  
新するようしております。

## 編集後記

本誌第119号が完成しました。しかし、レギュラーライターの中には原稿がなくて、ちよつと薄目の冊子となってしまいました。でも、岡田さんの毎回紙面からほとぼしり出るような力のこもった文章にはいつもながら敬服させられます。今回も、最初いただいた原稿量ではどうしても1ページの空白が出来てしまうので、ぎりぎりの時点で更にもう1ページ分の書き増しをしてもらえないかとお願いして、快く引き受けていただいたものです。

今年の羽化の会の新年会は、1月19(日)です。ここのとこ10年あまり、一時期ちよつと別の場所を利用しましたが、その他はずつと桜木町ワシントンホテル5階のレストラン・ベイサイドを利用してあります。東京・横浜両羽化の会会員の他に関係のあるにお集まりいただき、毎回ほぼ25名前後の参加をいただいています。今年はお都合の悪い方が多く、20名の予定となっています。楽しい会になりますように。

(木下 和久)

## (有) 横浜トランスファ福祉サービス

障害者自立支援法の下、障害者にガイドヘルパーを派遣して、外出を支援しています。対象は、横浜市在住・在宅の、視覚・肢体・知的重度障害者。

常時募集・ガイドヘルパー：資格・ホームヘルパー2級以上、および視覚・肢体障害者移動介護研修修了。

業務概要：上記障害者の外出支援。詳細は担当・柳田まで。

研修者募集：弊社では、ガイドヘルパー（視覚障害者）の資格取得研修を実施致します。詳細はホームページで。



URL: [www.ytrans.net](http://www.ytrans.net)

〒231-0063横浜市中区花咲町1-46-1

GSプラザ桜木町1105

電話: 045-263-0306

FAX: 045-263-0316

E-MAIL (岡田健嗣) : [okada\\_tr\\_eib@ybb.ne.jp](mailto:okada_tr_eib@ybb.ne.jp)

横浜漢点字羽化の会 URL : <http://www.ukanokai-web.jp/>

《表紙絵 岡 稲子》 次回の発行は4月15日です。

※本誌(活字版・DAISY版・ディスク版)の無断転載は固くお断りします。